(大阪市・金田園芸にて撮影)


# 大阪農業時報

発行所
大阪府農業会議
大阪市中央区農人橋2-1-33
JAバンク大阪信連事務センター3階
電話　直通 06(6941)2701～2
http://www.agri-osaka.or.jp
発行人 中谷　清


明けまして
おめでとう
ございます

平成31年元旦
大阪府農業会議
役職員一同


年金のお受け取りはJAで

JAバンク大阪(JA/信連)

JAバンク大阪へ　検索


## ガーデンシクラメン

すっかり冬の定番となったシクラメン。サクラソウ科シクラメン属の多年草。別名豚の饅頭、篝火花。正月に彩りを添えるために飾られる方も多いのではなかろうか。

原産地が地中海性気候であるシクラメンにとって日本の冬の寒さは厳しく、主に室内観賞用とされてきた。

20世紀末、ある日本の生産農家が、耐寒性のある原種との交雑により屋外での栽培が可能なミニシクラメンの系統を選抜し、ガーデンシクラメンとした。

これにより、風雨に曝されても元気な姿を保ち、屋外でも鮮やかな色合いを楽しむことが可能となった。

昨年は豪雨、台風、地震と多くの自然災害が爪痕を残し、大阪農業にも甚大な被害を与えた。

被害直後から、多くの生産者が復旧・復興に向けて日々努力している。堪えた寒さが厳しいほど春の暖かさをひとしお感じることができる。

そういう年になってほしい。（田村）

# 新年のごあいさつ

大阪府農業会議会長　中谷　清

新年明けましておめでとうございます。皆様方におかれましてはお健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、6月の大阪北部地震、7月の西日本豪雨、更に9月の台風21号と、相次ぐ災害により、大阪府内においても土石流や流木による農地被害のほか、ハウスの倒壊や破損など、甚大な被害をもたらしました。

現在、被災した農業者と関係者が一丸となって、復旧に向けた取り組みが進められています。被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

また、昨年には国連の委員会が、世界の家族農業の権利を守る宣言を採択いたしました。これは、小農の価値や役割を再評価し、食料の安定生産に向けた種子の確保や、協同組合への支援なども呼びかけています。この潮流は、本年から始まる「国連家族農業の10年」に引き継がれ、さらに大きなうねりとなることが期待されます。

大阪府内でも、農業委員、農地利用最適化推進委員が一体となって、大阪府、市町村、大阪府みどり公社、JA、土地改良区等の協力をいただきながら、集落座談会等の地域の合意形成に向けた取り組みを進めているところでございます。

こうした中、農地中間管理事業の5年後見直しにおいて、農業委員、推進委員が主体的な推進役として取り組むよう、改めて位置づけられることとなっております。

一方、昨年9月には「都市農地の貸借の円滑化に関する法律」が施行されました。これにより、相続税納税猶予の適用を受けた生産緑地の貸借が可能となりました。

また、指定後30年が経過した生産緑地の特定生産緑地指定に向けた取り組みも進んでまいります。農業委員会組織としても、JA等関係団体と連携しながら地域の農業者への周知徹底を図り、都市農地の保全・有効利用の取り組みを進めることがますます重要となっています。

農業委員、推進委員の皆様方におかれましては、地域農業者の代表、地域の世話役としての活動をより一層充実いただき、本府農業の振興に格別のご尽力をお願いいたします。

結びに、皆様方にとりまして本年が希望に満ちた佳き年となりますようご祈念申し上げ、新年のあいさつといたします。

# 新春を迎えて

大阪府知事　松井　一郎

新年あけましておめでとうございます。昨年11月、皆さまと心をひとつにして取り組んだ「2025年万博」の開催が決定しました。

6月に開催される「G20大阪サミット」とあわせて、世界の人々に大阪の存在を知らしめるまたとないチャンスです。

G20を成功させるとともに、2025年万博については、若い人たちをはじめ全世代の参画のもとに、これまでの常識を打ち破る、世界の課題の解決を図るものに創り上げ、成長・発展の流れを確かなものにしていきたいと考えております。

そのために、まずは、成長の基盤となる安全・安心のレベルをさらに高めることが最重要です。

昨年は全国で大規模な自然災害が頻発し、大阪では大阪府北部を震源とする地震や台風第21号などにより、多大な被害が発生しました。引き続き復旧に向けて着実に取組みを進めますとともに、今回の相次ぐ自然災害を教訓として災害対応力の強化に取り組んでいきます。

さて、大阪の農業・農空間は、都市近郊の利点を活かし、府民に新鮮で安全・安心な農作物を提供するとともに、生活に潤いとやすらぎをもたらし、快適な環境を提供しています。

2025万博が目指す〝いのち輝く未来社会〟の実現に向け、多面的な役割を担う農業・農空間を次代にしっかりと継承し、発展させていくことが重要です。

このため、本府では昨年3月に、「大阪府都市農業の推進及び農空間の保全と活用に関する条例」の改正を行い、新たな農空間保全制度をスタートさせております。本制度により、生産緑地を含む「農空間保全地域」において、将来の農地利用のあり方や担い手の確保などに取り組む地域を支援してまいります。

また、昨年9月には、国において生産緑地の貸借を認める「都市農地の貸借の円滑化に関する法律」が施行されました。

これにより大消費地に近い大阪の特性を活かし、生産緑地を高度かつ効率的に利用する農業がさらに促進されることが期待されます。

引続き、大都市大阪の特性を活かした競争力のある大阪農業の実現に向け、農業委員会、市町村や大阪府みどり公社、JAなどの関係機関の皆様との十分な連携のもと、全力で取り組んでまいります。

関係各位の一層のご理解、ご協力をお願いいたしますとともに、本年が皆様にとって実りある素晴らしい年となりますようお祈りします。

# 東京都、大阪府　農委会長が新大阪に

**大阪府農業会議は11月26日、東京都農業会議と共に、ホテルマイステイズ新大阪コンファレンスセンターで、農業委員会会長・事務局長会議を開いた。同じ都市農業という環境の中、両都・府の農業委員会活動の事例紹介や意見交換、先進農家の視察を行い、理解を深めてもらおうというもの。それぞれの農委会長や事務局長など、135人が参加した。**

開会にあたり、東京都農業会議の青山佾会長は、「近年、都市計画法や生産緑地法等の制度改正がある中、互いに大都市を抱える大阪・東京は協力しあう関係であり、交流を図ることでそれぞれの農業発展に役立てたい」と挨拶。

続いて、中谷清会長が「3年前の農委法改正で、『農地利用の最適化』推進について、具体的な成果をあげることが大きな課題であり、大阪でも集落座談会の開催を呼びかけている。昨今の『都市農地の貸借の円滑化に関する法律』など法改正についての制度周知と、それを活用した都市農地の保全・有効利用の推進も重要な課題となっており、両都・府で情報交換・交流を図ることは、非常に有意義である」と挨拶した。

歓迎の挨拶をする中谷会長

研修では、東京都側から、三鷹市と東大和市農業委員会より認定農業者組織支援と広報活動について報告があり、続いて「都市地域の農業経営」と題して、大阪府農業経営者会議の南保次理事による経営発表があった。

南理事は、規模拡大に限界のある都市部ならではの農業経営をめざして、地域住民との「田んぼアート」など交流事業の実施や観光イチゴ園の運営、「防災協力農地登録制度」への登録等、地域と共生した都市農業の実現を図っている。「都市農業の魅力は、消費者へ『顔の見える農業を展開すること』だと実感。地域住民と交流し、信頼関係を深めることが、若い人が関心を持つきっかけになり、後継者問題にも貢献できるのではないか」と話した。（中島）

自身の経営について話す南氏

11月27日には東京都農委会長等約60人が、大阪市内の農業者、西野孝仁さんと西村友宏さんのほ場をそれぞれ視察した。

東住吉区の西野さんは、シュンギクなど軟弱野菜を中心に少量多品目で約50アールの農業経営を展開。また、天王寺蕪など「なにわの伝統野菜」の栽培にも取り組んでいる。

住吉区の西村さんは、住宅街で花卉のハウス栽培を行っている。今から約30年前に父の行雄さんが、それまで行っていた軟弱野菜中心の経営から花卉栽培に転換。現在は、友宏さんに経営移譲し、マリーゴールドやベゴニアなど数種類の花壇苗を栽培している。（沼田）

栽培の工夫や都市部ならではの販路等の説明に参加者は熱心に聞き入った

## 風速計

「平成」最後のお正月。激動の日本経済や社会。脱兎のごとく駆け抜けた時代が幕を下ろす◆「脱兎」と言えば、一世を風靡した「ダットサン」を量産したのが現在の日産自動車。寒空に「ゴォォン」と響いた除夜の鐘の音も風雪にかき消され新年に◆「苦しいときの『仏?』頼み」とすがってみても思い通りにならぬは世の常。新しい時代は「謙虚」「正直」「命輝く」時代でありたい◆正月と言えば獅子舞か大道芸を思い出す。首から掛けた箱の上で人形を舞わして見せる門付け芸人「傀儡師」。陰で人を操る黒幕、策士とも言われる◆悪い意味ではなく、いついかなる時でも、新たな命を育て続ける農業者は、策を弄したり策に溺れることなく「食と農の傀儡師」として強烈な自負を持つべきではないか◆登場人物を自在に操り今なお人々を魅了する数々の名作を残した芥川龍之介がそうであったように◆世の中は箱に入れたり傀儡師（鈴木）

# 見つめて

## 頑張る経営者たち～

**昨年は世相を表す漢字に「災」が選ばれるほど多くの自然災害が起こり、大阪農業も多大なる被害を受けた。**
**府内生産者は被害直後より、ただちに営農再開に向けた復旧・復興活動に取りかかり、ひしゃげたハウスの傍ら、無事であったハウスで汗を流す。**
**逆境にあっても、期待と不安の中で歩む第一歩。**
**府内各地で将来を見すえて頑張る経営者たちを取材した。**

### 農業で地域を元気に　若い就農者を気遣う

岸和田市・木下良三さん、喜代治さん

岸和田市の木下良三さん(76)、喜代治さん(45)親子の農園「岸和田グリーンファーム」では、1㌶のハウス50棟、2㌶の露地でホウレンソウ、ミズナ、コマツナ、シロナを周年栽培している。雇用しているパートは10人。

そのハウスの内17棟が昨年の台風で吹き飛ばされた。喜代治さんは「何とか使える残骸を寄せ集めて」2棟を復旧。「寄せ集めで所々曲がってるので、写真撮影は恥ずかしい」とはにかむ。

「約3分の1が壊滅、約3分の1も半壊、残った3分の1もビニールが破れたり、支柱が傾いたり」。それでも「新たに就農した若い人たちはもっと大変。夢や希望を持てといっても余裕も技術もない。新しいハウスを建てたくてもお金がない。彼らにこそ支援が必要だ」。これまでに農地の世話、栽培指導から販売指導まで10人の新規就農者を育ててきた木下良三さんの痛切な願いだ。大阪府農業経営者会議会長、大阪府「農の匠」の会会長を歴任し、今年で農業委員も通算17年になる。

「僕には9年前に就農してくれた喜代治がいて助けてくれる。息子にも右腕となる相棒が必要」。いつの間にか父親の顔が覗く。

仕事は大変では？こっそり喜代治さんに聴いてみる。「ゴルフはもちろん、趣味は何でも」。友人からの誘いは忙しい合間の息抜きだ。

一昨年10月から農業者年金基金運営評議会委員。「厳しいとか、辛いとかってあまり思いませんねえ。どんな仕事に就いても楽な仕事なんてそうそうない」。大阪府農業大学校を卒業して一時は自営業の道を選んだ経験がその一言に込められている。

「夢ですか？」。少し間を置いて「もう少し考える時間があれば…」と吸い込んだ煙草の煙と共に言葉を絞り出した。あちこちに未だ復旧が進まないハウスがある中で、慎重に言葉を選ぶ。「時間がほしい。余裕があれば…」さらに経営を充実できる。親子の目には次のビジョンが映っている。

しかし2人とも黙して多くを語らず。抑制した物言いは若い就農者の苦労を目の当たりにしているから。「人も雇っているし、農の雇用事業で植田淳君（29）も頑張ってくれている。早く復旧しないと」。他人を思いやりつつ、しかし2人の当面の目標は、出来る限り早く残りのハウス15棟を建て直すこと。今年は正念場だ。

（鈴木）

喜代治さん（左）が残った資材を使って再建したハウスの前で良三さんと

# 未来を
## ～将来を見すえて

### 観光農園のハウス被害 すぐに態勢整え復旧
#### 八尾市・清水富久夫さん

八尾市神立の清水富久夫さん（71）はハウスイチゴ・観光イチゴ園11ｱｰ、花木約40ｱｰ等を栽培する認定農業者。神立は高安山の麓に位置し、江戸時代より花木栽培が盛んに行われてきた地区である。

台風21号の際には、イチゴのビニールハウスの屋根部分が飛ばされ、高設栽培設備がなぎ倒されたほか、切枝用の花木も風により倒される等の被害を受けた。

台風直後はハウス業者もなかなか来てくれず、イチゴ苗の購入先業者も被害を受けて作付スケジュールも遅れ気味であったが、シーズンに間に合わせるべく作業を進め、何とかイチゴ狩りの態勢を整えた。

同じく台風被害を受けた野菜用ハウスは未だ復旧していないが、作付けには間に合わせる予定だ。

清水さんは「近隣でも被害を受けた農家がたくさんいるが、皆前を向いて営農を続けている。何とか頑張ってやっていきます」と話してくれた。

（田村）

清水さんと妻・とみ代さん。ハウスの屋根部分も元通りに

### 台風被害を乗り越えよう！
#### 大阪農業応援マルシェ

府4Hクラブ連絡協議会、府「農の匠」の会、府ファームレディネットワークは12月9日、「台風被害を乗り越えよう！大阪農業応援マルシェ第2弾！」を難波千日前で開催。旬の大阪産農産物を販売した。

マルシェに先立ち、台風被害に遭った貝塚市の北野農園、岸和田市のキノシタファーム、同松本農園が、それぞれ壊れたハウスの写真を手に、被害状況や被害後の生産の現状等を説明。北野農園の北野清治代表は「大阪ではおいしい農産物をたくさん作っている。一生懸命やっている若手農家を応援してほしい」と話した。

また、府4Hクラブ連絡協議会の橋本嘉昭会長は、「台風被害を受けた農家は1日も早い復興をめざして頑張っている。温かい言葉は明日からの仕事の励みになっている。大阪産農産物を買って応援してください」と呼びかけた。

マルシェでは新鮮な旬の野菜や卵、ハチミツ等を販売。八百屋芸人の土肥ポン太氏も参加し、マルシェを盛り上げた。

（田村）

若手からベテランまで多くの農家が参加した

（特集）未来を見つめて

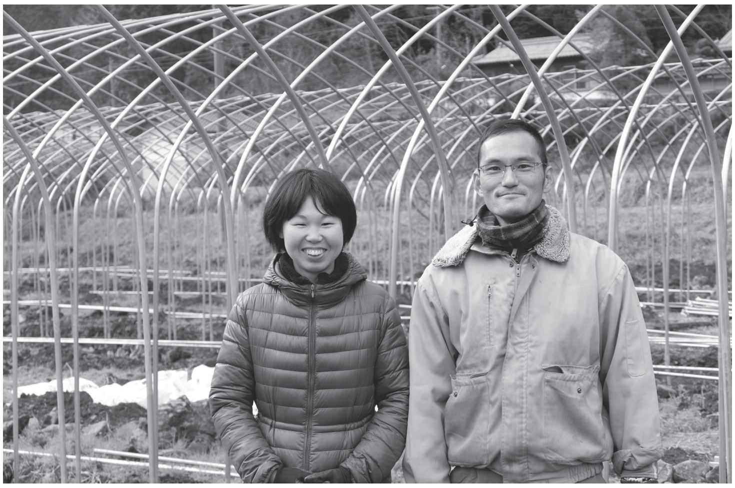
# ３度の水害にも負けない！今年は経営の基盤を再構築

## 能勢町・吉村次郎さん、聡子さん夫婦

「ハウスのパイプが使えるのが不幸中の幸い」と話すのは、能勢町倉垣の吉村次郎さん（41）。現在、トマトを定植する3月を目標に浸水被害に遭ったビニールハウスの移転作業を急ピッチで進めている。

吉村さんは兵庫県西宮市出身で、大学卒業後に能勢町内の農業法人での研修を経て独立就農。同じく能勢で新規就農した聡子さんと3年前に結婚。夫婦で地域農業を盛り立てる。

現在の経営規模は所有地46アール、借入地が58アール。ハウスでのトマトやイチゴのほか、キャベツ、レタス、白菜、ホウレンソウなどの露地野菜を栽培する。


吉村さん夫婦。背後は移転作業のハウス

一昨年7月からは農業委員に就任。「農業委員会のことはまだまだ勉強中。先輩方に付いていくのが精一杯」というが、周囲の期待は大きい。農委の芝久雄会長は「近年、町内で多くの人が新規就農した。これから地域を引っ張る若い人の代表として頑張ってほしい」とエールを送る。

昨年7月、西日本の広範囲に甚大な被害をもたらした豪雨災害。能勢町においても観測史上最大の降雨量を記録した。

同町上田尻地区では田尻川の堤防が一部決壊し、広範囲に田畑が浸水。吉村さんのハウス7棟が浸水被害にあった。

「7月の豪雨の後は、8月の台風20号。その後、9月に局地豪雨とハウスが3回も浸水したんですよ。大切に育てたトマトも全滅して本当に悔しかった」と当時の心境を振り返る。

最盛期を迎えるタイミングでの被害で、通常の年に比べて3割程度の収量に落ち込んだものの、日本政策金融公庫の融資なども活用しながら、経営の基盤づくりを着々と進める。

「昨年は、阪神タイガースと一緒で最下位みたいなもの。あとは上がるしかない。新しい年はこれからの経営基盤をしっかりと固める。そんな年にしたい」と力強く語った。（北川）

# 露地野菜でも台風被害 リベンジに向けて

## 泉佐野市・射手矢康之さん

関西国際空港の玄関口、泉佐野市上之郷地区で水稲をはじめキャベツ・タマネギの露地野菜を中心に大規模経営を営んでいる射手矢康之さん（50）も、台風21号で大きな被害を受けた。

育苗ハウス4棟10アールが倒壊し、育苗中のキャベツの苗が被害にあったほか、既に定植済のキャベツ約2・5ヘクタールのうち約2ヘクタールが全滅。約1カ月間は後片付けに追われて農作業が出来ず、米の収穫作業とも重なり、結局、定植予定ほ場の準備と定植の遅れを挽回すべく頑張ったものの、キャベツは例年の5～6割の面積しか定植できなかった。

さらに、定植の遅れはその後のキャベツの生育にも悪影響を及ぼし、露地野菜の場合は、台風の影響でもたらされた被害が非常に大きいと、射手矢さんは顔を曇らせた。

このような状況の中、射手矢さんは、「地球規模の環境変化が取り沙汰される昨今、今回のような台風の襲来を今後も覚悟しておく必要がある。米の作付けをやや減らして、秋のキャベツの定植を万全の体制で早めから取組めるようにしたい。また、被害については、行政からの補助事業等による直接支援もあてにできないことから、国が創設した収入保険にも加入する予定です」と述べるなど、昨年のリベンジに向けて、静かな闘志を燃やしている様子であった。（光崎）

今年苦労して定植したキャベツ畑にて

# 春には長男も就農 新しい品種も試してみるか

## 柏原市・巳波生治さん

「自然相手は何とかやっていくしかないな」と巳波さん

柏原市雁多尾畑でデラウェア約1㌶を栽培する巳波生治さん(58)。代々のブドウ農家で、妻と長男が作業を手伝っている。認定農業者の農業委員であり、大阪府「農の匠」の認定も受けている。

ハウスは斜面地特有の波状ハウスで、昨年の台風21号では風を受けて支柱が曲がる、折れる等の被害を25㌃にわたり受けた。

「今までは大雪でも台風でもハウスをこかしたことはなかったが、経験したことのない台風だった」という。地域の若手農業者も復旧を手伝ってくれ、まだ完全な復旧には時間がかかるが、目途はつきそうだ。

今後の地域の農業については、「自分が地域でいちばん若手である時期が長かったが、最近は若手が増えている。新しいことにチャレンジする若い子も多いし、熱心にやっている。柏原の農業の未来は明るいんじゃないか」と巳波さん。3月に大阪府農業大学校を卒業する20歳の長男も、卒業後は一緒にやっていく。

「一時期はブドウ価格の低迷もあり不安もあったが、最近は持ち直してきた。これなら息子にも跡を継いでみるかと言える。今は販売方法の選択肢も増えたし、一緒に大粒系の品種も試してみようか」と展望を語る。

「農作物は物を言わないから、おかしいところは気付いてあげないといけない。手をかければかけただけ返してくれる。手を抜いたら抜いただけのものしか出来ない。そんなところが楽しい」と軽妙に話してくれた巳波さん。体が動くうちは頑張るよ、とのことだ。

(田村)

# 台風被害、まずは原状回復をめざして

## 富田林市・南信宏さん

富田林市佐備地区の約2㌶の農地で、野菜を中心に年間約50品目の多品目栽培に取り組む南信宏さん(43)も、台風21号で大きな被害を受けた。

9月4日の台風直撃後、直ぐに圃場に駆けつけてそこで目にしたのは、今まで経験したことがない程の惨状。「あまりの被害の大きさに茫然自失状態で、しばらくはどこから手を付けたら良いかわからなかった」と南さん。

結局、14棟30㌃のハウスのうち、1棟2・4㌃が全壊し、4棟10㌃が半壊。

後片付けに着手したものの、被害が軽微だった作物等の収穫作業と被害を受けたハウスの応急修理は、現在もまだ続いている。また全国的な災害発生の影響から、資材納入や業者への手配が遅れ気味で、本格的な復旧には年明け以降も、まだしばらく時間がかかるようである。特に、今回の台風で、育苗用のハウスが大きな被害を受けたため、作付面積の減少による被害が大きいと嘆いた。

そんな中、全半壊したハウスについては、行政による支援事業を活用して復旧する予定。「約20年前に、新しく建てた直後のハウスが台風で全壊し、その時は農業共済に未加入であったため自費で再建せざるを得ない結果となった。その経験から、以後必ず農業共済には加入するようにしており、今回、それが大いに助かりました」と南さんは述べた。

昨年新たな正社員を採用し、経営規模の拡大に取り組みつつあった矢先の台風被害。「経営規模の拡大計画は一旦見合わせ、まずは台風前の作付規模まで原状回復することが先決です」と南さんは力強く語った。

(光崎)

復旧したハウスの前で

JA大阪府大会

# 信頼、必要とされるJAめざし

## 「合併構想」検討の特別決議も

「協同の力で拓く大阪農業と地域の未来」をスローガンに、JAグループ大阪は12月7日、大阪市内のシティプラザ大阪で第24回JA大阪府大会を開いた。

挨拶に立ったJA大阪中央会の岸本会長は、自己改革への更なる取り組みとして、持続可能な都市農業の実現や、それを支える組織の経営基盤確立、人材育成、情報発信の取り組みを強化し、組合員、地域から信頼されるJAをめざす重要な3年間だとして、徹底した取り組みを求めた。

「JAが地域社会に不可欠の存在となるよう望む」と祝辞を述べる中谷農業会議会長

JA、連合会など府内の関係者約380人が参集し、10年後のビジョン達成に向けた向こう3年間の重点施策5項目を決議したほか、「JAグループ大阪の経営基盤強化の取り組みに関する特別決議」を採択した。

来賓として大阪府竹内副知事、岩木府議会議長、近畿農政局小林次長はじめ関係者が出席。大阪府農業会議の中谷会長は、農業者支援の一環として生産緑地の貸借に積極的に関わっていただきたい。農業協同組合運動の原点を改めて確認し、今後とも総合的な事業の推進を通じて府民の認知度を高めていただきたいと祝辞を述べた。

決議されたのは、「持続可能な都市農業の展開」「経営基盤の確立による健全・堅実なJA経営」「組合員・地域との関係強化による組織基盤の確立」「協同の理念を実践する人材の育成」「協同組合と大阪農業の情報発信」の5項目。

このほか特別決議も採択され、「府内5～3JA、さらには府内1JAを視野に入れた広域合併の検討」「遅くとも2021年3月までに『合併構想』の成案を得る」「各JAが合併実現までに達成すべき目標を掲げ、これらを府内JAで共有」することを確認した。

合併構想は、すでに一昨年6月のJA大阪中央会通常総会で、「1兆円規模のJAを基本に、将来方向としては府内1JAをも視野に入れ」て、協議、検討を進めること、などが報告されている。

今回の特別決議は、昨今の情勢変化のなかで「自己改革」に取り組むJAが、地域になくてはならない組織として存続し続けるためには、営農指導、経済、信用、共済事業等を合わせて行う「総合事業体」としての経営基盤強化が求められることから採択されたもの。

大会では組合員組織表彰も行われ、終了後は作家でエッセイストの森久美子氏が「大阪農業・JAの魅力と課題―JA自己改革でピンチをチャンスに―」と題して講演した。

（鈴木）

# 農福連携の事例を基に理解促進

## ハートフルアグリ交流会

大阪府は、従前から取り組んでいる「ハートフルアグリ（農と福祉の連携）トライアル促進事業」の一環で、11月29日、農福連携に興味のある農家や福祉施設などを対象に、交流会を開催した。

はじめに「農業インターンシップでうまくいった事、気をつけたい事」と題し、パネルディスカッションが行われた。

パネリストとして参加したキノシタファーム代表・木下健司氏は、本事業を活用して福祉施設と請負契約を結び、取り組んだ経験談を紹介。

「仕事の任せ方として、障がい者の方へは結果が明確に分かる作業を、従来のパートさんには判断が必要な作業をしてもらうなど、仕事の割り振りを区別することで、段取りよく作業を回すことが出来た」と、実際の受入れの際の工夫について話した。

福祉施設側からは、「障がい者は、内職とは異なり外に出て働くことで、新鮮な体験と社会性を身に付けることができたと思う。施設側も障がい者と一緒になって農作業に取り組み、受入れ農家と適宜仕事内容について話し合い、互いにより良い関係を築いていくことが大事」と参加者へ助言した。

また、大阪府立環境農林水産総合研究所の豊原憲子主幹研究員は、「栽培から出荷までの一連の作業で、障がい者への仕事の割り振り方が重要。例えば、球根の定植作業でも畝にネットを張り、植付場所を分かりやすく工夫すれば、障がい者向けの作業になる。農家側・施設側双方で適性を見極める手始めに、インターンシップ活用は良いきっかけになるのでは」と呼びかけた。

（中島）

# 味噌作りで能勢町の魅力発信

## 食彩茶屋部会「めんめ」

大阪府の最北端に位置する能勢町。平成8年、能勢町観光物産センター設立に伴い発足した食彩茶屋部会「めんめ」では、10人の農家女性がこの地で農業を営む傍ら、農産物の加工品の開発に取り組んでいる。

「めんめ」とは、この地域の言葉で、「めいめい」や「それぞれ」を意味する。

「品質チェックやデザイン担当など、ひとりひとりの得意分野を生かし、適材適所で仕事を分担しています」と話すのは、代表の芝多美子さん（70）。

7種類ある商品の中で、一番の主力商品は発足当初からある「歌垣みそ」。寒さが極まる12～2月中旬にかけて作業に取りかかり毎年約3㌧仕込んでいる。

味噌は、米麹と大豆、塩を原料として作り、米麹に使用する米は、能勢町産のキヌヒカリのみで地場産にこだわる。

作業は3日間連続で行われ、1日目に米麹を作り、2日目に発酵段階で米をほぐす「切り返し」、そして3日目に大豆を炊き、米麹、塩と混ぜ合わせて味噌作りの仕上げ作業になる。

また、衛生管理と温度管理には、特に気を使っており、雑菌の進入・繁殖を防止するため、水が付着しないよう作業ごとの道具ひとつに対しても点検を怠らない。また、麹菌が死んでしまわないよう、米の温度が均一になるように気を付けている。

すべて手作業で、丁寧に作られた味噌は、約1年間の熟成期間を経て、完成する。

主に、能勢町観光物産センターで販売されており、今では、この「歌垣みそ」をベースにした商品、調理味噌の「そこがみそ」や能勢町産柚を使用した「柚みそ」、同じく地元産山椒を使用した「よござんしょ」なども様々な用途で使用できる点が好評で、定番商品として店頭に並ぶ。

芝さんは、「後継者不足が一番の課題だが、活動を続けることで、能勢町の農産物の魅力を発信し、今後の後継者の確保も含め、後世の世代に伝えていきたい」と意気込んでいる。（中島）

米麹作りで、蒸した米を冷ます作業

# クビアカツヤカミキリに注意！

## この冬に防除対策を

モモやさくら等のバラ科の樹木が被害を受けている。

平成30年1月に特定外来生物に指定されたクビアカツヤカミキリによるもの。国内ではこれまで7都府県で被害があり、府内では平成27年に初確認。南河内地区を中心に堺市、大阪市へ分布域を拡大している。

クビアカツヤカミキリの成虫

クビアカツヤカミキリは樹皮表面などに産卵し、孵化した幼虫が樹木内へ食入する。被害が進むと果実の成長が阻害され収量が減少するだけでなく、やがて枯死する。

被害の目印となるうどん状のフラス

食入した幼虫はフラス（糞と木くず、樹液などが混ざったもの）を排出するため、4～10月にかけて株元にうどん状の太いフラスがあれば、被害を受けている可能性がある。

他の樹木への分散を防ぐには、幼虫が樹木内で越冬するこの時期から5月までに、樹幹にネットを巻きつけるか、伐採するなどして防除する必要がある。

詳しい防除方法は「クビアカツヤカミキリ被害対策の手引き（（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所作成）」、府農政室推進課病害虫防除グループホームページ等を参照。または各農と緑の総合事務所農の普及課まで。

## 月間農政ファイル　11・25～12・21

12・8　政府は、欧州連合（EU）との経済連携協定（EPA）を参議院で可決、承認した。農林水産物の82％の関税を撤廃する。EU側の関心が高いソフト系チーズでは段階的に関税を削減・撤廃。環太平洋連携協定（TPP）を上回る譲歩となる。来年2月1日に発効する見通し。

12・10　近畿農政局は、近畿府県の平成30年産水稲の作況指数が98であり「やや不良」と発表。大阪府は99で「平年並み」となった。

12・14　自民・公明の両党は、31年度税制改正大綱を決定。特定の農地を農地中間管理機構（農地集積バンク）に売却した際の所得から２０００万円控除し、税負担を減らし、バンクの利用を促す。

12・21　政府は、今年度補正予算を閣議決定した。農林水産関係費は５０２７億円を確保。うち、TPPやEPAの国内対策費は３１８８億円とし、農業の生産体制強化の加速を図る。

# 門真市で生産緑地説明会

## 受付等日程見込みなどを説明

　ＪＡ北河内門真ブロック（村橋幹男ブロック長）と門真市農業委員会（中野利佑会長）は、11月28日にＪＡ北河内門真中央支店で生産緑地制度に関する説明会を開き、関係者を含めて約80人が集まった。

　説明会では生産緑地法の改正、都市農地貸借円滑化法について農業会議鈴木専務理事が、門真市における特定生産緑地指定の手続を都市政策課職員が説明した。

　最後に「税制から考える生産緑地制度について」をテーマに税理士の三浦希一郎氏が講演した。

　門真市内の生産緑地は75地区17・66㌶で約90人が所有している。市では、来年度末まで制度周知と意向確認を進め、２０２０年度から特定生産緑地の指定を受け付けて２０２２年度８月には指定の告示をする予定。

### 生緑の賃貸希望が３割

　当日実施されたアンケート（回収率67％）では、生産緑地を自身で耕作している人の内、他の人に貸借したいという希望が11件（31％）、貸したくないが24件（69％）となった。

　また、この日の説明会で特定生産緑地制度について「良く理解できた」と答えたのが14件（32％）、「概ね理解できた」27件（61％）、「あまり理解出来なかった」３件（７％）となった。　（鈴木）

# 全国農委代表者集会

　全国農業会議所は11月29日、東京都・メルパルクホールで全国農業委員会会長代表者集会を開いた。大阪府からは各地区農委連合会会長、農業会議役員など13人が参加した。

運営委員長報告を行う
中谷全農会議所副会長

　第１部では、「農地利用の最適化の実現に向けて～３ヵ年運動の点検と新たな運動の展開に向けて～」と題したパネルディスカッションを開催。

　また、「農地利用の最適化の取り組み強化に向けた申し合わせ決議」及び『情報提供活動』の一層の強化に関する申し合わせ決議」が行われた。

　第２部では、要請決議が行われ、「農地利用の最適化に向けた施策推進に関する要請決議」が採択された。要請活動では、大阪選出国会議員に対して要請を行った。　（北川）

# 第33回常設審議委員会

　大阪府農業会議は12月17日、大阪市内・ＪＡバンク大阪信連事務センターで第33回常設審議委員会を開いた。

　第１号議案の農地法第４条及び第５条の規定に基づく意見聴取に回答する件（高槻市、茨木市、能勢町、箕面市、和泉市、岸和田市、堺市、太子町、富田林市、河内長野市、羽曳野市、八尾市、寝屋川市農業委員会会長）については、22件（１万７４０４平方㍍）を許可やむを得ないと認める旨、回答することを議決した。

　報告事項として、「農業経営基盤強化促進法等の一部を改正する法律」について説明した。

　回答の内容は次のとおり。

【第１号議案】

| | 件数 | 面積（平方㍍） |
|---|---|---|
| 第４条 | 6 | 3620 |
| 第５条 | 16 | 1万3784 |
| 合　計 | 22 | 1万7404 |

（農地区分別件数は、３種農地８件、２種農地14件）

# 最適化指針などで情報交換

## 三島地区職協担当者会議

　三島地区農業委員会職員協議会担当者会議が11月30日、吹田市役所で開かれ、同地区の農委職員など９人が参加した。

　会議では、新体制の農業委員会活動の課題となっている農地利用最適化交付金の活用や「農地等の利用の最適化の推進に関する指針」の策定状況について情報交換が行われた。

　農業会議からは沼田主事が出席した。

# 各地で農委研修会

　12月中、各地で農委研修会が開かれた。このうち農業会議事務局が出席し、情勢報告を行った研修会は次のとおり（①開催日、②開催場所、③テーマ、④農業会議事務局出席者）。

○貝塚市農業委員会（永橋啓一会長）

①12月６日、②貝塚市役所、③改正生産緑地法等について、④鈴木専務理事

○南河内地区農業委員会連合会府外研修会（会長・上田幸男大阪狭山市農委会長）

①11月14～15日、②滋賀県内、③最近の農業情勢について、④鈴木専務理事

○泉南地区農業委員会連合会農事視察研修会（会長・鈴木實熊取町農委会長）

①11月21～22日、②鳥取県内、③最近の農業情勢について、④鈴木専務理事

○泉佐野市農業委員会農業事業調査（勝間富士男会長）

①12月４～５日、②滋賀県内、③最近の農業情勢について、④鈴木専務理事

○泉南市農業委員会（中野吉次会長）

①12月７日、②泉南市役所、③改正生産緑地法等について、④北川次長

○羽曳野市農業委員会（尼丁信廣会長）

①12月12日、②羽曳野市保健センター、③農業委員会の責務について、④鈴木専務理事

# 生産者と食関係者をマッチング

## 大阪市都市農業振興セミナー

12月4日、大阪市内・大阪ガスハグミュージアムで「門上武司と学ぶ、食べる！大阪市内産野菜」と題し、飲食・食ビジネス関係者や市内産野菜に興味がある者を対象としたイベントが開かれた。主催は大阪市。

イベントでは有名料理人が調理した田辺大根や難波葱を参加者らが試食し、門上氏が解説を加えた。

また、ゲストとして市内農家の上田隆祥さん、西野孝仁さんが参加。難波葱と青ネギの違いや田辺大根の特徴について説明した。西野さんは、「素材にどんなおいしさがあり、どう手を加えるとなお一層おいしくなるのかは素材自身が教えてくれる。持ち味を活かした料理をつくってほしい」とメッセージを送った。

門上氏は「大阪市は生産者と料理人の距離が近く、コミュニケーションをとりやすい。地元にどんな食材があるかを知り、自分との関係性をどう作っていくか考えてみてほしい」と話した。

（田村）

飲食店との日頃のやりとりや素材の特徴についてトークがくりひろげられた

## 経営者会議役員会、法人協会合開く

大阪府農業経営者会議は12月6日、大阪市内で役員会を開催。研究会開催にあたり、他の農業者団体との共同開催や役員改選等について協議した。

大阪府農業法人協会は同日、大阪市内で会合を開き、来年1月に大阪で開催する近畿府県農業法人現地交流会の運営等について協議した。

## 随　想

# 皆をまき込んでの田園空間の再生を

JT生命誌研究館　館長　中村　桂子

先日東京で「田園自然再生活動の集い―ともに学び、成長する（育つ）場としての田園空間」という集会に参加しました。東京生れの東京育ちで農業が身についているわけではないのですが、生きものの研究をしているうちに暮らしの基本は農業であると実感するようになり応援団になりました。農業高校の応援をしたり、小学校に農業科を設置するのをお手伝いするなどで子どもたちと接するのは本当に楽しいことです。

応援の一つとして、日本中で農業はもちろん農村の文化なども含めた活性化の活動をしているグループ「田園自然再生活動協議会」の会長役をさせていただいており（あまり役に立ってはいませんが）、メンバーの活動発表を楽しんだのです。

農村の人だけでなく都市住民も、子どもも大人も参加して農村環境をよりよくする活動なので、これが最も力を発揮するのは大阪のような都市に近い場でです。農業従事者だけでなくすべての人が農村を育てる活動に参加することによって自分自身も育つのがわかり、農の力を実感します。参加者は、人と人とのつながりが生れるのが楽しいと語ってくれます。

ところで、今の社会は、人間は生きものであり、食べることは生きることの基本ということを忘れさせる方向に動いています。多くの人が多くの時間をコンピュータやスマートフォンなどを通しての情報収集や交換に使っています。グルメ情報を集め、食べたいものを注文すれば望みの時に届く便利な社会になり、食べものを作るための苦労は陰に隠れてしまっています。長い時間かけて野菜、牛、豚などを育てている人がいることなど頭の中にありません。情報は一見つながりを作るように見えても本当のつながりは生み出さないのです。体を使って行なう作業がどんどん減っていき、自分が生きものであることを忘れてしまうのではないかと心配です。その傾向は当然のことながら都市住民に強いので、この人たちに農業の大切さを具体的に伝え、参加を促すことがとても重要です。

都会の高層ビルで、生れた時から情報器機に囲まれ、おもちゃはスマートフォンというような子どもたちは、大人があたりまえと思っている生きものとしての感覚をもたずに育っています。意図的に自然と接する機会を作らないと、土の大切さがまったくわからない人になる危険性があります。農業の未来はどうなるか。

農業が持っている生きものを育てる力を、人間を育てるところにまで広げる必要があります。今、大阪という都市での農業は重要な役割をもっていると言えるのです。

◇筆者の紹介（なかむら　けいこ）
1936年東京生まれ。東京大学理学部化学科卒業、同大学院生物化学博士課程修了。国立予防衛生研究所、三菱化成生命研究所、早稲田大学教授、大阪大学連携大学院教授を経て、現在JT生命誌研究館館長。

# 農業委員会委員・事務局職員の横顔

## 農業者の代表、地域の世話役

として奔走する農業委員会の委員や活動を支える事務局職員には、普段の業務では見られない様々な顔がある。そんな委員と職員の「横顔」を紹介する。

いちばんの傑作は般若心経を彫り込んだ作品だ

### 人生は出会い　そして経験

**貝塚市農委・永橋啓一会長**

「窯を開ける瞬間。これほどわくわくするときはない」と話すのは貝塚市農業委員会の永橋啓一会長。自宅に窯を持ち、陶と書を融合させた作品を制作している。

民間企業を退職後に陶芸に興味を持って泉佐野市の窯元に習い、二つと同じものが出来ないことに魅力を感じ、創作活動に取り組む。陶芸のほか、油絵や書は独学で学び、ケナフを植えて紙すきも行う。

「人生は出会い　そして経験」「人は経験を超え得ず、経験は全てに勝れり」

様々な出来事を振り返り、感じたことを認め(したため)、作品にしてきた。これから先の考えを尋ねると「今日一日を、今を大事に一生懸命生きる」ことが肝要であると返ってきた。（田村）

## 200万年前のゾウを日本酒に

### 地酒用の酒米を生産

**吹田市農委・吉田俊之会長**

約250万年前から120万年前に吹田にも生息した「アケボノ象」を日本酒に――吹田市農業委員会の吉田俊之会長が生産するヒノヒカリを使った日本酒「吹田のゾウ」が好評を博している。

きっかけは3年前。吹田市内で行われた朝市で、市内の酒店・木下名酒店から「吹田産米を使った日本酒を作りたい」と話を持ちかけられた。現在、木下名酒店での販売のほか、飲食店でも一部取り扱われるなど地元で少しずつ広がりを見せている。

今年は、台風21号の影響で米の収穫量は3割以上落ち込んだが、何とか例年通りの量の酒米を確保することができた。

吉田会長は、「北摂を流れる水がおいしい酒米を育み、口当たりの良い仕上がりに繋がっているのでは。今後も口コミ等により地元の方々に広まり、親しんでもらえると嬉しい」と話す。（沼田）

「今は住宅が建ち並ぶが昔はもっと田んぼが続いていた」
吉田会長は、この地で50年以上米づくりを続けている

## 短歌で鳥飼の名を全国に

**摂津市農委　髙橋好恵さん**

豊かなる
実り願ひて
田畑に
手を合はせたる
初春の朝

「よい鳥飼なすがたくさんできるよう、初詣の帰り、保存畑にも手を合わせています。農家の方々も、同じように豊作を願いながらお正月を迎えられているのかなと思い、新年に向けて詠んでみました」と摂津市農業委員会事務局職員の髙橋さん。

「農業の大切さや、鳥飼なすの名前を少しでも多くの人に知ってもらいたい」との思いから、日頃接する鳥飼なす栽培の情景などを詠み、全国農業新聞等に投稿。度々掲載されている。

GREEN PRINTING JFPI P-D10004 本社・本社工場
この印刷製品は、環境に配慮した工場で製造されています。